

第3回 国連防災世界会議 パブリック・フォーラム 連動企画

## ミニ防災セミナー「学ぼう！ 災害への備え」

道の駅「上品の郷」(宮城県石巻市) 平成27年3月14日(土) 10:30 ~ 12:10

ミニ防災セミナー「学ぼう！ 災害への備え」が3月14日、石巻市の道の駅「上品の郷」で開催され、参加者約100人が会場を埋めた。道の駅「上品の郷」と道の駅新聞「ルートプレス」の発行元NPO人と道研究会の主催で開いたセミナーで、この日から仙台市で開幕した第3回国連防災世界会議のパブリック・フォーラムと連動した企画。

東日本大震災から4年目を迎えたばかりのセミナーだけに、参加者は真剣に講演を聴いていた。

セミナーの概要を「ルートプレス」レポートとして国連防災世界会議パブリック・フォーラムの参加者に速報する。



### ■講演①

#### 「東日本大震災と道の駅」

道の駅「上品の郷」駅長 太田実氏

大津波はすごい勢いで北上川堤防を破壊し、上流の大川小学校では多くの子どもが犠牲になりました。地元において助けられなかったのは痛恨の極みで、子どもたちには教訓を学んでもらいたいと願って、震災遺構を残したいと訴え回っています。

上品の郷に避難してきた人たちは最大時に2,500人。玄米、味噌、漬物、紙コップ、お汁などを提供しましたが、食料は1週間分ぐらいしかなく、有料にするか悩みました。

温泉には毎日1,000人が入り、顔を洗う場所が少ないなどもめごともあり、整理券を出し有料にしました。いろいろな経費が5000万円になり、国交省や市と話し合っただけで防災協定締結になりましたが、体の不自由な方、精神的に大きな影響を受けられた方の対応をどうするかなど、課題はまだたくさん残っています。



### ■後援の挨拶

国土交通省東北地方整備局 仙台河川国道事務所 所長 牧 哲史氏



道の駅は国土交通省と市町村が連携し、道路利用者と地域の皆様の利便、地域振興をめざす公共施設です。近年の相次ぐ地震で道の駅が避難や救助に活躍したことをきっかけに、防災拠点としての役割も評価され、自家発電設備や給水タンクなどの整備も進められています。国連防災世界会議の折、このセミナーが災害に強い地域づくりに貢献することを願います。

石巻市長 亀山 紘 氏(土井建設部長代読)

あの震災の停電・輸送途絶中でも、上品の郷が太陽光発電により24時間点灯し食料や入浴施設の提供を続けてくれ、希望を失わずにすみました。以来各地の自治体が道の駅と災害時の協定を結ぶようになりましたが、今後とも地域振興とともに防災面で役立ってくださるよう大いに期待しています。天皇皇后両陛下にお出迎えの市長に代わりメッセージをお届けします。



### ■プログラム

- ・主催者の挨拶 (10:31~10:35)  
道の駅「上品の郷」駅長 太田 実氏
- ・後援の挨拶 (10:35~10:50)  
国土交通省東北地方整備局  
仙台河川国道事務所 所長 牧 哲史氏  
石巻市長 亀山 紘氏
- ・講演① (10:50~11:15)  
東日本大震災と道の駅  
道の駅「上品の郷」 駅長 太田 実氏
- ・講演② (11:15 ~ 11:30)  
道の駅「大谷海岸」で起こったこと  
元駅長 米倉 兵一氏
- ・講演③ (11:30~11:45)  
その時の私。今なら話せること  
元宮城テレビ アナウンサー 義山 望氏
- ・講演④ (11:45~11:55)  
宮城県の防潮林について  
宮城県緑化推進委員会 永田 一朗氏

## ■講演 ②

「道の駅『大谷海岸』で起こったこと」 道の駅「大谷海岸」元駅長 米倉 兵一氏



日本一海水浴場に近い道の駅でしたが津波で壊滅しました。150人の生産者や地域の方々の熱い再開要望で、一か月半後に仮復旧しました。トタン板ぶきの物置のような小屋で夏は40度、冬はマイナス7度。案内看板も手づくりでした。とりあえず入手できた商品を並べただけで、ラーメンぐらいは提供したいと思いましたが、トイレや水の法規制が厳しく、隣接地からビニールパイプの水道を引いてやっと保健所の許可をもらいました。あの時のラーメンの味は忘れられません。

でも、わずかなお客しかなく、地元名産のフカヒレを自分の車に積み、千葉、神奈川、新潟県などに出張販売し、皆さんに買っていただき励まされて感激しました。道の駅は平常時も災害時も地域の拠点だという貴重な体験をし、子どもたちに伝えたいと現役を退いた今も大事にしています。

## ■講演 ③

「その時の私。今なら話せること」 元宮城テレビアナウンサー 義山 望氏

大震災発生当時、仙台の宮城テレビ局内で情報番組の放送準備中でした。すぐ自家発電に切り替わりますが、電話網壊滅で知りたいこと、伝えたいことがまるで集まりませんでした。それから4日間は会社に泊まり込んでテレビの放送に専念しましたが、大勢の避難者がロビーで寝泊りもしていて、特に不自由のなかった日常生活のありがたみを痛感させられました。

5日目に帰宅したら電気がなくテレビも見られないと気づき、一生懸命伝えたはずの情報がまるで伝わっていない地域もあると気づいたのは大きなショックでした。身近な安否情報がほしいという要望をあちこちで聞き、また、日ごろから災害に備えることや避難場所を知っておくことの大切さも思い知らされ、改めてローカル局としての存在意義を自覚しました。



## ■講演 ④

「宮城県の防潮林について」 宮城県緑化推進委員会 永田 一朗氏

国土を海に囲まれた日本は、「白砂青松」という独特な美しい風景が形成され、日本人の心に大きな影響を与えてきました。東日本大震災で宮城県沿岸部の国有林、民有林計約1442haが流失・倒伏しました。これらの海岸林は自然にできたものではなく、江戸時代から約400年もかけて、先人たちが防潮などのために苦労して育てたものです。海岸林は防災ばかりでなく環境保全や地域振興、観光レクリエーションなどに大きな役割を果たしているため、私たちは今多くのNPOやボランティアやなどに呼びかけ、海岸林の再生に取り組んでいます。地域振興の拠点である道の駅でも植林活動への参加や「緑の募金」への寄付を呼びかけていますので、よろしくお願ひします。多様な役割を果たす美しいふるさとの海岸林を一緒に取り戻しましょう。



## ■道の駅を「学びの場」に

東日本大震災の悲しみを繰り返さないためにも、日ごろから防災への意識を高めることが大切になります。それには、郷土の災害の歴史や伝承などを知ることで、故郷に対する郷土愛を育むことが重要です。ルートプレスの発行元「NPO人と道研究会」はそんな思いでこれまで、「道の駅を『学びの場』に」と、全国各地の道の駅で「ミニ防災セミナー」を開催してまいりました。

島根県浜田市の「ゆうひパーク浜田」を皮切りに、千葉県南房総市の「和田浦WA・O!」／高知県香南市の「やす」／栃木県茂木町の「もてぎ」／千葉県山武市の「オライはすぬま」などで実施してきました。

今回は「国連防災世界会議」のパブリック・フォーラムとの連動企画として、東日本大震災の救援・復旧に尽力された「上品の郷」で開催でき、意義深いセミナーが実現しました。

「NPO人と道研究会」は今後も、全国「道の駅」連絡会とともに、全国の道の駅で順次、「ミニ防災セミナー」を開催していきたいと考えています。